

氏名(本籍)	新 <sup>しん</sup> 谷 <sup>たに</sup> 真 <sup>ま</sup> 由 <sup>ゆ</sup> (京都府)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博乙第2600号		
学位授与年月日	平成24年4月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	身体と環境は比喻表現の発生にいかにかかわるか -日英仏言語文化論の試み-		
主査	筑波大学教授		安井 泉
副査	筑波大学教授	文学博士	川那部 保明
副査	筑波大学教授		山田 博志
副査	佛教大学文学部英米学科教授	博士(文学)	瀬戸 賢一

### 論文の内容の要旨

本論文は、「端」を表す *bout* の意味の拡張、排泄行為に関する婉曲表現、色彩語の意味の拡張という事例研究を通して、意味は自由に自然発生しているのではなく、「意味の主体を構成する身体とそれを包み込む環境が双方向的に影響し合うことにより創発される」ことを詳細に論じている。

第1部の第1章では、伝統的立場と認知意味論的立場の二つの視点から、比喻(主にメタファー)の役割を明らかにした。伝統的な視点では、メタファーの役割は、喩えるものと喩えられるもののあらかじめ存在すると考えられる客観的類似性を報告し、それを明るみに出すという言語上の技術および技巧の一種であるとされてきた。しかしながら、第1章の後半および第2章にて、認知意味論的視座に立つ「つける」の研究、*over* の研究、言語的時間の研究より、メタファーには「方略」という機能があることを明らかにした。メタファーとは、世界の中に存在しその世界を理解しようとしている人間が行う認知的営みの一部であり、環境と身体、身体的経験と心的経験をつなぐ機能を体現している。第1部では、人間が環境内で行う主体的な経験がことばの意味を創発させていることを明らかにした。

第2部では、比喻の機能として、「ピントを合わせる」と「ピントをずらす／ぼかす」との二種類に機能があることを例証し、比喻がどのように日常的な思考を形作っているのかを論じた。「ピントを合わせる」のはメタファーの役割、「ピントをずらす」のはメトニミーの役割、「ピントをぼかす」のはシネクドキの役割である。第3章では、「ピントを合わせる」表現として、フランス語の名詞 *bout* に見られる多義性およびその意味拡張のメカニズムを明らかにした。主体が空間内において身体的経験を繰り返すことによって得た *bout* の抽象的構造物(4つのイメージ図式)は、メタファーを通じて時間や他の抽象的概念領域に投射されることにより、抽象的な経験にはっきりとした輪郭を与えることを明らかにした。第4章では、排泄行為に関する婉曲表現を生成する手段としては、「ピントをずらす」機能をもつメトニミーと、「ピントをぼかす」機能を持つシネクドキが多用されることを指摘し、さらに、メタファーも時として排泄行為の婉曲表現を作り出すことがあるもののその例はごく少数であること、メタファーは大抵の場合、諧謔的な表現(スラング)を生成する手段として用いられることを明らかにした。第3章で見たようにメタファーには「ピントを合わせる」機能があることがその理由として考えられるので、ピントをずらしたいときにむしろピントが合っ

しまい逆効果となりうるからである。一方で、メタファーが重層的に用いられる場合は排泄行為から距離を置くことが可能となり、婉曲表現生成の手段にもなり得ることも同時に明らかになった。婉曲表現を創り出すメトニミー、シネクドキ、時にメタファーは、主体の社会的（言語）生活を円滑なものにし、他者との伝達に極力問題を生じないようにさせるための「社会的な装置」として機能している。第4章の後半では、主体が文化的に作られた共有物を内面化することにより、排泄行為に関する理想化認知モデルを作り上げていると論じた。このモデルが主体に心的に保持されるため、実際に風呂のないデパート等でも bathroom という表現がトイレを意味する表現として使用可能となってくるのである。

第3部では、フランス語・英語・日本語の各個別言語の色彩語に観察される意味の派生関係を分析し、色彩語の具体的意味と抽象的意味（比喩的意味）が、身体と環境との相互作用的経験から創発されていることを明らかにした。第5章では、色彩語に関する先行研究として普遍主義的観点に基づく Berlin & Kay (1969) と Kay & McDaniel (1978) を概観すると共に、両研究の「焦点色こそが基本的色彩語の意味」との主張に疑義を唱えた。第6章では、科学のおよび生物学的視点から色彩という光学的な現象と人間の神経系が行う色知覚のメカニズムを考察し、神経系が行う色知覚は人類に普遍的であるとした。一方で、第7章、第8章、第9章では、主体が行う色彩の経験や概念化は各個別言語において全てが普遍的というわけではないことも明確にした。第7章では、フランス語の黒を表す noir と白を表す blanc がもつ複数の意味の派生関係を分析し、両色彩語の概念化には人間が環境内で行う光と闇の経験が深く関わると論証した。第8章では、英語の black（黒）、dark（闇）、blue（青）の具体的意味と抽象的意味の派生関係を例証した。第8章の前半では、英語の black とフランス語の noir との相違点を論じ、noir では「光がなく空間として暗いこと」が具体的意味と抽象的意味の基礎となっているために、「暗いこと」を「黒いこと」で表すことになっている、英語では、black は歴史的に「燃えた後の色」の意味が元にあるために、「色相として黒いこと」が具体的意味と抽象的意味の基礎となっている。英語においては「光がなく空間として暗いこと」は dark が表すため、「黒いこと」と「暗いこと」とは別の概念であるのに対して、フランス語ではいずれも noir が担う。したがって、フランス語の noir と英語の black は等価値ではない。さらに、blue が借入元のフランス語にはない独自の抽象的意味の「悲観」「気の減入り」をどのように発展させてきたのかを論じた。身体的にネガティブな色と、蝨燭の炎の色には構造的な類似性があるため、それが blue の「悲観」や「気の減入り」という意味の動機づけになっている。第8章の後半では、フランス語と日本語における借入語としての blue の特徴を比較考察した。フランス語については、ロマン主義の時代に「悲観」や「気の減入り」を表すものとして英語の blue devils/diables bleus が借入されたが、その後すぐに廃用となっており、その替わり、黒が「悲観」や「気の減入り」を表すものとして定着するようになる過程を明らかにした。20世紀になり、フランス語は英語の blue から派生された the blues (=le blues) を音楽用語として借入し、「悲観」や「気の減入り」の意味を付加するようになっている。le blues が「悲しみを歌う歌」として借入された経緯があるため、メタファーの意味も色彩ではなくこれに由来することを明らかにした。フランス語では青は悲しみを喚起する色彩とは捉えられる素地はない。一方、日本語はフランス語に比べて英語の blue（ブルー）に柔軟であり、「ブルーのシャツ」と具体的な色彩も表す語である一方で、「気持ちちがブルーになる」と抽象的な「悲観」も意味する。理由は、日本語が英語の意味拡張の構造をそのまま借入しているからである。借入語の「ブルー」は英語の色相の範囲を出ることはなく、日本語の「アオ」と同じような意味分布（例：緑色の範囲）を持たない。「彼は青い」と「彼はブルーだ」とが、比喩表現として等価値の表現とはならないが、これは、具体レベルでの意味範囲が抽象レベルの意味範囲を規定しているからである。第9章では、歴史的な視点から日本語の基本的色彩語である「アカ」「シロ」「クロ」の意味を考察し、その抽象的意味が、環境内で行う経験に由来すると論じた。日本語の「アカ」「シロ」の意味は共に「光のあること」に基づいている。「アカ」が「光のあるなし」のみに基づくのに対し、「シロ」には「光のあるなし」に加えて、「他との際立ちがはっきりしており、

くっきりと把握することができる」意味も加味される。日本語文化の歴史的な意味形成においては、「暗いこと」と「黒いこと」との間に表裏一体の関連性が存在し、「クロ」には否定的な意味が見出されていること論証された。闇の経験が否定的な概念に結びつくのは、フランス語、英語、日本語の各個別言語において共通であり、人間が環境の中において得る普遍的な経験に基づいている。だからといって各個別言語において否定的な概念が一樣に、黒色に結び付くのではないとも論じた。具体的には、日本語で「死」との結び付く色が黄色（「黄泉路」や黄色の水引など）で表されたり、英語においては青（to burn blue）で表されたりする。身体的基盤を同じくしながらも、世界で起こる現象への解釈の仕方やそこで行う経験に見出す意味が常に一樣というわけでない。フランス語、英語、日本語のそれぞれの色彩語が持つ複数の意味は、重なり合うところもあれば、全く異なるところもある。色彩語の意味に違いがあるとすれば、環境への理解の仕方が異なるからである。環境のどの部分に注目し別の部分を切り捨ててことばにするかは、各言語・文化共同体に依存している。その意味でも、Berlin & Kay および Kay & McDaniel の「焦点色および色知覚そのものが基本的色彩語の意味である」という論調は強すぎる主張である、各言語・文化共同体に属する主体の集まりが経験を解釈し直したものが、色彩語の真の意味であると見なすべきである。

本論文は、人間が世界で行う経験を解釈するのは人間自身であり、その解釈の仕方は各個別言語共同体・各文化共同体によって異なる可能性があり、人間が同じ身体的基盤を有し一般認知能力においては同じ道具立てをもっているものの、経験を意味づけるのは各共同体の主体の総意（間主観性）となることが論証された。

## 審査の結果の要旨

比喩表現が誕生する際に人間の身体と人を取り囲む環境がいかにかわってくるかがこの論文の主題目である。この主張を展開するための事例研究として、個々の具体的な細かな議論は、その一つ一つがきわめて興味深い輪郭のはっきりしたものとなっている。比喩の本質あるいは比喩表現発生メカニズムには幅広い現象が縦横無尽に関わってくる。この現象を網羅的に考察しようとする、かなり細かいところまでさまざまな分析に枝葉を広げていく必要がある。その際、太い幹は枝葉にともすれば隠れそうになるが、読者がその主張の大筋を見失うことがないように、さらに、読者が十分に太い幹に添って読み進められるような論文構成が工夫されている。

人間と環境の地平の先に地続きで比喩が発生するという本論文の主張の中心は高く評価されるべきものである。メタファー、メトニミー、シネクドキの比喩の仕組みに加えて、その機能としてピントを合わせる・ずらすという概念が導入されている。その用語を今後より洗練させていく必要はあるであろうが、比喩の機能を社会言語学的要請に収斂させていく言語使用は確かに存在しているのであるから、今後の発展が期待される。

比喩表現の発生はきわめて自由に行われているという印象を受けることがあるが、それは間違いであり、一見自由に見えていても、人間の身体や人間を取り巻く環境の影響を強く受けている。そういう考えをさらに進めて、人間の身体とそれを取り巻く環境を連続したものと考えその地平の先に地続きのものとして発生する比喩表現という主張は、従来の比喩発生の方針に一石を投じるものとなっている。意欲的に収集された事例には興味深いものが多く含まれており、主張と共に細部が記憶に残る論考となっており十分に評価できる論文である。

平成 24 年 2 月 17 日、人文社会科学科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究所論文審査等実施細則」第 10 条 (1) に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全

員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。